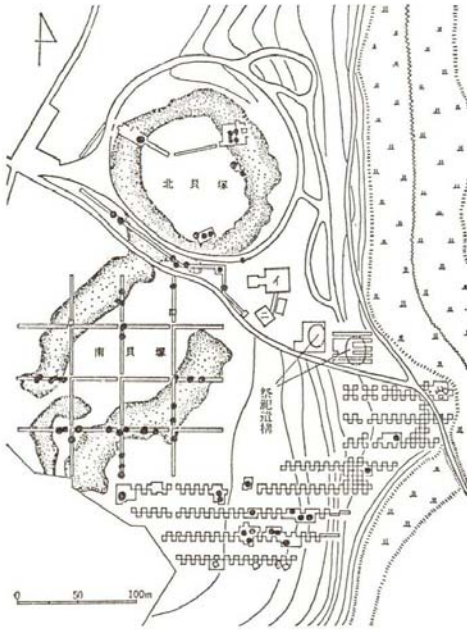


三 縄文人の生活と信仰

集落と住居

縄文時代の集落は、広場を中心に円形に堅穴住居を配置する大形の環状集落や、群集する大規模集落、あるいは移動式の平地住居や屋外炉からなるキャンプサイトの集落、単独住居しかない集落などさまざまな形態がある。環状集落の場合、丘陵地の頂上部の平坦面を広場とし、その周囲に堅穴住居を建て、更にその外方に生活廃棄物を捨てた貝塚が形成されている。このような貝塚は馬蹄形をな



第5図 縄文時代の集落（加曾利貝塚）
 (●は住居跡、『千葉県史』より)

す場合が多い。千葉県加曾利貝塚（第5図）では中期と後期の九四五三平方メートルの貝層分布が確認されている。しかし、このような大規模集落も、普通一時期に存在した住居は五〜六軒で、人口も三〇人前後と想定されている。ただし、近年青森県三内丸山遺跡ではより大規模な集団の集落も確認されている。また、縄文時代の集落内に

はしばしば屋外炉が検出されるが、これは調理場として使用されたものと考えられる。

住居の形態は竪穴住居が一般的であるが、掘立柱建物や平地住居などもある。竪穴住居跡は平面形が円形または方形で、大きさは四〇〜五メートル程度が一般的である。千葉県市川市姥山貝塚は台地の縁辺部に馬蹄形に住居跡が分布しているが、ある住居跡内には成人男女各二人と小児一人の合計五人が生き埋めになっていた。このような例からして一つの竪穴住居内に生活した人数は四、五人程度と推定されている。なお、竪穴住居のなかには非常に大形のものもあり、集会所や共同作業所として使用されたと推定される。掘立柱建物は東日本で前期に発見されるが、集落の中心部に位置することが多く、集会所や祭祀儀礼のための多目的施設であろう。平地住居はテント式の移動可能な住居で、狩猟などで短期間滞在するために設営した住居である。

縄文人

縄文時代の貝塚から出土する人骨をみると、縄文人の顔は幅に比して高さが低く、長方形に近い輪郭をなす。眉間はふくらみ、鼻のつけ根が引っ込み、上下の歯は先端部が低く、長方形にう。身長は現代日本人と比べると一〇センチメートル前後低く、男性が一五八センチメートル程度で、女性はこれより一〇センチメートルほど低かった。しかし、手足は重労働に耐えうる強健な骨格であった。このような身体的特徴は、現代日本人とはやや異なり、中国華南で発見された後期旧石器時代の柳江人や現代の東南アジア人に類似しており、南方系に近いと考えられている。なお、縄文時代には小児の死亡率が高いため、平均寿命は二〇〜二五歳前後と推定されている。

縄文人の信仰

縄文人はあらゆる自然現象に靈的な存在を認めていた。そのため、狩猟などの生産活動に伴う儀礼や、人生の節目における通過儀礼などをアニミズムの信仰で対処していた。

縄文時代の墓地は、集落内部の広場かまたは近接した場所に設置される場合が多い。秋田県鹿角市大湯環状列石は多数の墓を径五八メートルの環状にめぐらせたものである。埋葬方法では、遺体の手足を曲げて埋める屈葬と、まっすぐに伸ばしたままで埋める伸展葬とがあるが、全国的には屈葬が一般的である。また、旧石器時代に比べ死者を丁重に葬る傾向があり、墓からは生前着用していた装身具が発見されることが多い。

土偶（第6図1・3）は約七五〇〇年前の早期前半のものが関東地方で発見されており、その後縄文時代を通して全国で製作されている。その形態は早期・前期では大まかな表現にとどまるが、中期になると顔面や手足が明りようになる。またこの時期形態に地域差が生じ、中部地方では立体的な土偶が現れる。後期には山形土偶（1）・みみづく土偶（2）などが作られ、晩期には亀ヶ岡文化圏で遮光器土偶（3）と呼ばれる大きな目の特徴の土偶が作られる。土偶が何を表現したものか定説はないが、遺跡で発見される場合、必ずといっていいほど頭や手足が壊されている事実から、なんらかの信仰儀礼に使用された道具であろうと想像される。

土偶のほかには縄文人の信仰を反映した遺物に、土版・岩版、土面、石刀、石冠、御物石器、石棒などがある（第6図）。土版・岩版（5・7・8）は東日本の晩期の遺跡から発見され、曲線や直線あるいは列点でさまざまな図形を彫り込んだ方形や楕円形の板状の製品である。土面（6）は各種の祭祀で使用されたと推定される土製の仮面で、後期・晩期の遺跡から発見されている。石刀（10）は柄を作りだした棒状の磨製石器であるが、実用的な武器ではない。石冠（12）は大きさが一〇センチ前後の石製品で、さまざまな形態があるが、冠ではなく非実用的な道具と考えられている。御物石器（13）は石川県比良遺跡で発見されたものが明治天皇に献上されたことから命名されたが、用途は不明である。中部地方の晩期の遺跡を中心に発見されて

第2章 縄文時代



第6図 縄文時代の各種遺物

1~3 土偶 4 動物形土製品 5 土版 6 土面 7・8 岩版 9 石棒
 10 石刀 11 独钻石 12 石冠 13 御物石器 (小林行雄『日本考古学概説』より)

装飾と装身具

いる。石棒(9)は男性器を表現した石製品と考えられている。長野県佐久町北沢川から発見された石棒は全長二三センチメートルを計る。人体の一部を表現した遺物は、ほかにも耳・鼻・口などの土製品や、女性器をかたどった石製品、手形・足形を押しした粘土板などがある。これらの遺物は縄文人の精神的生活の所産である。縄文人の精神的生活の一端は、身体や顔などへの入れ墨や彩色などに表現されていたと推測されるが確認された例はない。健康な歯を抜く抜歯は晩期に列島各地で行われていた。

愛知県田原町の吉胡貝塚では、一三三体の成人人骨のうち一二五体が抜歯していた。また、岡山県笠岡市津雲貝塚では、鹿角製腰飾りや杖状耳飾りけつじょうなどを持つ人骨が出土している。抜歯はある規則性をもって実施される通過儀礼の一種で、

その形態の相違や装身具の有無から、出自や婚姻の様子などを知ることができる。

装身具(第7図参照)とし

ては、頭や耳、首、腕、腰などの部位に装着する土製、石製、貝製、骨角製などの製品がある。頭部の装身具には、骨角または骨製のへ



第7図 装身具を付けた縄文人

右は前期の女性 左は晩期の呪術者(町田章氏原図)

アピンのほかに、前期の福井県鳥浜貝塚からは漆を塗った木製の壺が発見されている。耳飾りには、主として、玦状耳飾りと耳栓とがある。玦状耳飾りは東アジアに広く分布し、日本では早期末に中部・北陸地方で出現し、前期には関東・東北・近畿・九州の広い範囲で見られる。素材は滑石・流紋岩などが多い。耳栓は中央部がややくびれた鼓状の土製品で、中期中葉に東日本で登場する。また、晩期の群馬県千網谷戸遺跡などからは透し彫りを持つ円形の土製耳飾りが出土している。首飾りは縄文時代に特有の硬玉製大珠のほかに、石や土で作った勾玉・丸玉・管玉・垂玉などを連ねたネックレス状のものもある。硬玉は新潟県姫川流域と富山県東部に良好な産地があり、中期・後期に同地域で集中して大珠などを製作していた。また、琥珀製品は千葉県銚子や岩手県久慈に産地があつた。腕飾りは貝輪が早期から縄文時代を通して広く使用されていた。二枚貝と巻貝では製作方法が異なり、時期や地域によっても貝の種類が異なる。腰飾りは鹿角の枝分かれた部分を利用した装身具で、中期前半に関東・東北地方で作られ、晩期になると近畿から九州にかけての地域でも使用される。装身具であるとともに、呪術的な用途が考えられている。

第二節 豊津の縄文時代の遺跡

現在確認されている町内の縄文時代の遺跡としては、節丸西遺跡・徳永川の上遺跡・神手遺跡・鋤先遺跡などが発掘調査によって内容が明らかにされている。また、丸山遺跡・尾花原南遺跡・台ヶ原南遺跡・頭無